

「和牛五輪」V奪還へ

飛騨牛ブランド、県が強化

2.8億円計上

和牛日本一の栄光を再び。県は2018年度、飛騨牛の生産体制の強化とブランド力を高めるため、担い手の育成や繁殖拠点の整備、県の組織改編に取り組む。「和牛のオリンピック」と称される全国和牛能力共進会（全共）で日本一を目指すとともに、開始から8年で輸出量が80倍に増えた海外輸出にも対応する。

（松田尚康）

繁殖センター整備支援

5年に1度開かれる全共で、飛騨牛は02、07年大会の肉牛部門で最優秀枝肉賞を勝ち取ったが、12、17年は逃した。

県は畜産課に飛騨牛銘柄推進室を設けて5人を配置し、畜産研究所に課長級の飛騨牛銘柄推進監を置く。遺伝子解析などの先端技術を用い、22年の全共で日本一を奪還できるような質の良い子牛を産める母牛を調査する。

高齢化などで減少する繁殖農家の担い手確保も課題。100頭規模の繁殖雌牛を飼育し、繁殖農家の就農を希望する研修生を受け入れる「飛騨牛研修・繁殖



全国和牛能力共進会の復興特別出品区(高校の部)で県代表牛を出品した飛騨高山高校。最優秀賞を獲得した＝昨年9月、仙台市(県提供)

センター(仮称)の整備を支援する。1カ所は岐阜

輸出用の肉は現在、J A 飛騨ミートが県内で唯一処理でき、16年度は24・6トン。県飛騨保健所の獣医師が全頭の異常の有無を検査しているが、他の業務を兼ねており、輸出量の増大やEUや米国の厳しい衛生管理基準を満たすために体制の強化が求められていた。飛騨食肉衛生検査所を新設し、専従と兼務の獣医師9人を配置。高山市清見支所内に事務所を置き、将来は新しい事務所を建てる方針。

当初予算案に関連費2億8405万円を計上した。

県の担当者は「センターの開設で、繁殖農家の希望者が一歩を踏み出すきっかけになれば」と話している。